

# 東南アジア史学会会報 No. 51

1989年11月

## 目 次

1989年度春季総会摘録	1	第41回研究大会：	
第12期第 5回委員会	3	プログラムと発表要旨	7
1988年度会計決算報告	4	研究・資料短報	19
地区例会・研究会	5	新入会員・住所変更等	22

## 1989年度春季総会摘録

上記総会を1989年6月4日神戸大学で開催し、川本邦衛委員が議長となり、次の議事をはかった。

### 《報告事項》

#### 1. 生田会長より、次の報告がなされた。

本日ここに東南アジア史学会第41回研究大会を開催することができましたことは私をはじめ委員一同の深くよろこびとするところであります。顧みますと、会長に就任以来約1年6ヶ月を経過致しました。この間私はまず会務運営をつかさどります委員会の運営に力をそそぎ、会務運営の円滑化ならびに学会の歴史を後世に残すため、会務運営の記録、資料の作成、保管に努力するほか、学会の財産をはじめて調査し、財産目録を作成いたしました。また私は学会財政の健全化につとめ、年間の財政の収支を均衡させるようつとめました。その結果現在学会はほぼ1年分の予算額に相当する運転資金を保有し、当面会費値上げ等の必要を感じないようになりました。このほか研究大会の開催地等につきましてもできる限り予定をたてることといたしました。なお私はさらに学会の将来を考え、学会の機構、運営、および活動につきまして全般的に見直しをはかり、今後の発展を

可能ならしめるために、委員会内部に将来計画検討委員会を設置し、石井米雄、後藤乾一、白石昌也、土屋健治、山本達郎の5氏をそのメンバーとし、鈴木恒之庶務委員を事務局とすることとし、昨日開催されました委員会において諒承を得ました。なお同委員会には本年12月までに答申を提出していただくよう、御願いするつもりであります。このほか委員会におきましては研究大会の運営を円滑にするために、次期会長の選出および委員の選出に先立ち、次期第1回の研究大会の会場を前以て決定し、また機関誌『東南アジアー歴史と文化ー』につきましても、直ちに次号の編集を開始し、刊行期日をまもることができるよう配慮することを決定致しました。

なお私は関東地区例会にはできる限り出席いたしました。また関西地区例会にも昨年12月に出席いたしました。地区在住の会員の方々に御目にかかる機会を得ました。今年度は少なくとも中国、四国地区例会、および中部地区例会に出席し、各地区在住の会員と御目にかかる機会を作りたいと考えております。またできれば北九州地区においても地区例会のようなものを発足させることができるかどうか考えてみたいと思っております。さらに私はできる限り会員数の増加をはかるよう努力したいと思っております。

委員会のメンバーにつきまして多少の変動がございましたので、この機会をおかりして御報告申上げたいと存じます。坪井善明北海道地区委員がハノイに出張されたので、同地区委員は当分の間欠員とさせていただきます。また大橋厚子編集委員が一身上の御都合で大阪に移られましたので、関東側におきましては慶應義塾大学言語文化研究所の三上直光先生に編集委員を御願いいたしました。

また研究大会報告者および委員の中、大学院生およびそれに準ずる方々に対しましては、一定額の旅費等の補助を支給することといたしましたので、御諒承いただければ幸いと存じます。

なお会長選考委員会委員の選挙につきましては、本年9月上旬に選挙管理委員を指名し、9月下旬には選挙の準備にかかりたいと存じておりますので、あわせて御報告申上げます。

今年6ヶ月余りの在任期間中に会員名簿を発行し、また第42回研究大会を開催しなければなりません。学会運営一般ならびにこうした事業につきましては、委員一同に計りまして会員の皆様の御理解と御協力をいただきたく存じます。よ

ろしく御願いいたします。ありがとうございました。

2. 庶務委員より、会員数323名（1989年5月末現在）との報告、新入会員6名の紹介、会員名簿改訂のための協力要請があった。
3. 会計委員より、1988年度会計決算報告があった。報告日付は12月31日が正しく、会計監査委員により訂正されたことが確認された。また会長候補者選考委員選挙のための選挙権・被選挙権者は1989年8月末日までに1989年度会費を完納した会員にすることが報告された。
4. 編集委員より、学会誌『東南アジアー歴史と文化ー』第18号の編集・発行について報告があった。また、第19号の編集方針・準備および原稿募集について説明がなされ、毎号巻末に掲載の文献目録に掲載漏れがあれば通知してください、との要請がなされた。
5. 渉外委員より、IAHA大会の1991年6月、香港大学にての開催、ICA NAS大会の1990年8月、カナダ、トロント大学にての開催、第4回International Conference of Thai Studies の1990年5月、中国、昆明市にての開催、について報告がなされた。
6. 各地区の例会・研究会開催状況については、時間不足のため割愛された。

#### 《協議事項》

1. 第42回研究大会（1989年度秋季）について、1989年12月2日、3日に早稲田大学にて開催することが承認された。なお、シンポジウムの課題決定は大会委員に一任された。
2. 第43回研究大会（1990年度春季）について、1990年6月2日、3日に摂南大学にて開催することが承認された。

### 第12期第5回委員会

1989年6月3日、神戸大学、出席者20名

4日、〃、出席者24名

会長が議長となり、上記総会案件を審議決定した。

1988年度 東南アジアアセアン会  
会計決算報告  
(1月1日 - 12月31日)

会計委員：根本 健

I. 収入の部	円	II. 支出の部	円
会員会費	1,779,500	第39回大会予報	19,400
貯金利子	18,895	会報No.48 第39回大会プログラム	158,310
バックナンバー売上げ	160,064	印刷費及び発送費	1,18,815
業績目録(新)売上げ	55,200	第39回大会費	20,200
会員名簿売上げ	4,000	第40回大会予報費	
大会援助費	310,000	会報No.49 第40回大会プログラム	
広告収入	24,000	印刷費及び発送費	141,560
前年度繰越金	1,904,239	第40回大会費	257,240
計	4,255,898	『東南アジア歴史と文化』17号誌代	921,120
		『同』バックナンバー引取り	
		(平凡社への第2回支払い)	
本決算報告書、会計簿帳告表及び第一勵業銀行		業績目録作成費	
普通預貯金通帳、郵便貯金通帳、1988年12月30日付		慶弔費	
郵便振替受取通知书のそれぞれに記載の残高と		会賛助費	
照合し、かつ領收書等を実検した結果、報告の成		事務局移転費	
容に誤りがないことを確認した。		通信費	
		事務費	
		計	2,223,255
		III. 差引残高(次年度繰越金)	2,032,643
		計	4,255,898

1988年12月30日



## 地区例会・研究会

### [関東地区] 於: 上智大学アジア文化研究所

関東例会では、上智大学アジア文化研究所に会場のお世話をいただいて、4月以来、以下の月例研究会を開催してきました。なお7月の研究会は東南アジア・イスラーム研究会との共催で行いました。

1989年 4月22日 吉田敏浩「ビルマ・シャン州、カチン州解放区の 3年半」

5月27日 加藤 栄「1975年南部解放以降のベトナム文学の動向」

7月15日 西村重夫「インドネシア共和国の公立学校に於けるイスラーム教育」

9月30日 弘末雅士「千年王国運動における伝統の復権 —— 北スマトラ・バッタク地区におけるパルフダムダム運動」

(池端雪浦・白石昌也)

### [中部地区] 於: 南山大学

第51回 榎田勝利「カンボジア現状報告 —— 自転車を届けた村からの報告」

第52回 細井佐和子「ドモイ(刷新)中のハノイ —— ハノイ留学報告」

第53回 長谷川清「宗教とエスニシティ —— 雲南シップソンパンナーの事例から」

(明石陽至)

### [関西地区] 於: 京都大学東南アジア研究センター

1989年 4月 8日 高井康弘「北タイ農村社会と守護霊儀礼」

5月 6日 菅谷成子「18世紀中期フィリピンの非キリスト教徒中国人追放令について」

6月10日 土屋健治「美しきインドネシア《Indonesia Indah》考」

7月 8日 松尾 大「スタンブル劇ノート」

9月 9日 大野美紀子「阮朝初期の嘉定米について —— 生産地の形成とその性格 —— 」

10月 7日 桃木至朗「ベトナムにおける『民族形成』と『中国化』をめぐって」

(大西和彦・堀田桂子)

[中国・四国地区]

I 東南アジア研究会（於：広島大学文学部）

1989年 4月 8日 ノム・ウンガムニサイ  
10/6 (タイ国シーナカリンウィロー大学助教授)

“The Geography of Thailand”

II S E A F (於：広島大学総合科学部)

1989年 5月30日 山尾正博「タイの漁民協同組合組織の将来方向」

6月27日 三野洋子「タイ・ビルマ国境——カレン族兵士と難民の  
村訪問記」

西澤信善「破綻したビルマ型社会主義」

なお、10月と12月にS E A F例会を予定しております。（植村泰夫）

## 第41回研究大会

第41回研究大会は、1989年6月3日（土）、4日（日）の両日、神戸大学で開催された。大会プログラムと発表要旨は次の通りである。

6月3日（土）

開会の辞

北原 淳（神戸大学）

<個人研究発表>

ビルマの創作文学『ヤダナーチェーモン』をめぐって

原田正美

（大阪外国語大学・非常勤講師）

北タイ農村社会と守護霊儀礼

高井康弘（神戸大学）

タイの地方政治

橋本 卓（北九州大学）

パプア・ニューギニアにおける贈与交易

紙村 徹（天理大学参考館）

ベトナム南圻フロンティア社会と明命帝の地方改革

鳴尾 稔（東京大学・院）

銅鼓の分布からみた東南アジア初期国家群の成立基盤

今村啓爾（東京大学）

6月3日（土）

<共通論題> 東南アジアにおける近代文学の成立をめぐって

主旨説明

吉川利治（大阪外国語大学）

ベトナム

加藤 栄（ベトナム文学研究者）

タ イ

宇戸清治（東京外国語大学）

ビルマ

堀田桂子（ビルマ文学研究者）

インドネシア

松尾 大（大阪外国語大学）

コメント

中原道子（早稲田大学）

池端雪浦（東京外国語大学）

総合討論

司会：土屋健治（京都大学）

閉会のことば

生田 澤 会長

\*なお、宇戸清治氏の発表は、氏の急病のため今回は見合わされた。

## 《個人研究発表・要旨》

### ビルマの創作文学『ヤダナーチェーモン』をめぐって

原田正美

『ヤダナーチェーモン』（以下『ヤダナー』と略記）は、1780年頃、シュエダウンティーハートゥによって著わされ、未完であったものを、後にコウンミン・ウー・ターが完結させた、ビルマ文学史上現存する初の創作文学作品であるとされている。

この作品は、スケールが大きく、ナガー、ガロンの跳梁する摩可不思議な物語として、また王子王女の恋愛を描いた物語として、ビルマ文学の最高傑作という人もいる。ここでは、『ヤダナー』の特殊性について、試論を報告したい。

その際、『ヤダナー』の誕生に、間接的に、大きな関わりをもつものとして、ジンメーパナータ（50話余りあるチェンマイジャータカ、以下「ジンメー」と略記）を考慮する必要がある。「ジンメー」とは、15—6世紀に、タイのチェンマイ地方の一僧侶が、当地で蒐集された説話を基にし、それをジャータカ風にアレンジし、50編余りにまとめた世俗的要素を多分に持つジャータカである。

まず、ナガー、ガロンの跳梁する空想の世界について考察する。これらは、上座部仏教の世界観を忠実になぞったものである。特徴的なことは、臍部州内のスッダサナ山や、ガンダマーダーナ山に、架空の天女の国があり、仏教でいう天界とは別の、世俗のパラダイス空間で物語が展開されることである。

また行為の比較から解るように、『ヤダナー』には仏陀はもとより、比丘、寺院にいたる一切の具体的な仏教的因素が見あたらず、粹物語でも、補助者が大なり小なり偶発的に重要な役割を担っている点が特徴的である。（粹物語に関しては、ウー・ターがかろうじて前世との因縁を明示した。）補助者は主として、超自然的力をもった人物もしくは動物、物等である。

以上の二点は、ビルマで詩、演劇の素材となった「ジンメー」のいくつかの作品にも共通するものである。またそれ以前の仏陀を中心としたインドの実在（実在したとされる）都市、人物等を中心に展開される物語世界とは、一線を画して

いるようである。

さらに「ジンメー」との共通項から一步前進して、そこからビルマ的な要素を抽出できることが望ましいが、その他諸問題を含め、ここではそれを指摘するに留め、今後の課題としたい。

### 北タイ農村社会と守護靈儀礼 —ピープーヤー儀礼の検討—

高井康弘

北タイにはタイの他の地方にない独特の儀礼慣行が存するが、ピープーヤーへの供儀儀礼もそのひとつである。デービス、タートン以来、ピープーヤーは母系で継承される祖靈(ancestor spirit)と報告され、従来、単系原理を欠く社会とされてきたタイ農村社会における母系出自觀念存在の証として注目されてきた。また、その守護・懲罰的性格からピープーヤー儀礼は村びとレベルの法規範を表現するものとして注目された。

今回は、こうしたピープーヤー儀礼の性格の再検討を、1985年から1987年にかけてチェンマイ県の一農村にて収集した資料に基づいておこなう。以下にそのポイントを挙げる。

①こんにちの村びとの觀念によるかぎり、ピープーヤーは祖先の靈魂ではない。

自然靈や先住民の精靈など異界の精靈を祖先が宅地内に持ち込み、代々慰撫儀礼を行い、馴化してきたものである。ピープーヤーは本来外部の精靈ゆえ定期供儀が必要で、馴化したものゆえ惡靈自然靈より力が弱い。しかし供儀を遵行し、障りになる行為をなさねば一定の加護が期待できる。

②ピープーヤーは出自觀念のシンボルである。ピープーヤー信奉は親から子へのみ継承される。しかし、母系の出自規則については、つぎの但し書きをつける必要がある。1. ピープーヤーでも種類によって父系を理念とするものがあること。2. ただし調査村ではいずれにおいても実際には母系継承の傾向が強かったこと。3. 男女とも結婚後の居住地に関わらず婚前からの信奉を維持する場合が多い。ただ、信奉の継承には供儀の継承の要素が大きく、そこに信奉選

扱の余地も生ずること。4. 系統性観念の未発達な母系継承のタイプであること。5. 信奉者のなかにも供犠を司るいくつかの地位があり、地位の継承性を別個に検討すべきこと。

③ピープーヤー信奉の社会的機能は、ピープーヤーにまつわる供犠者、憑依者、解釈者などの役割を、どのような社会的範疇の人々が担っているのかに関わるがこうした役割の配分や社会内でのその相対的地位は、仏教の浸透等との関わりで変化してきている。

## タイの地方自治制度

橋本 卓

これまでのタイの地方自治は、中央集権的な官僚優位の地方行政のもとで、国土の大部分を占める地方農村部の存在にもかかわらず、地域住民の政治参加によって支えられてきたわけではなかった。19世紀以来タイにとって、独立維持のために「地方」の国家への統合が国家統合の至上課題であった。そのためチャクリ改革期には積極的に地方行政改革が推進されることになる。しかしそれは、あくまでも中央集権的な統治のための地方再編成でしかなかった。当然そこには、住民自らが地方政治に参加するという自動的な行政が志向される余地はほとんどなかった。西欧の地方自動的な制度も導入されたが、それは形式だけであり、「自治」(kan-pokkhrong ton eng)とはほど遠いものであった。さらにその後の改革もつねに政治変動に翻弄されながら展開されてきたため、制度としての地方自治の拡張にもかかわらず、「自治」能力という点では大きな期待はできなかった。

このようなタイの地方自治に現在転換期が訪れている。1970年代以降、とくに80年代にはいってからの国際環境の変容と国内の社会経済変化は、これまでの軍部と官僚による政治支配にも影響をおよぼしはじめた。政治過程における民主主義的なルールがより強調されるようになったのである。そしてこのような国政レベルの変化は地方レベルにも波及しつつある。しかし、従来のバンコクを中心とする国家レベルの政治的評価だけでは、こうした問題を検討する判断材料として

は不十分である。地方自治の発展は民主主義普及の一つの指標であり、地方自治のあり方が国政の将来とも密接に連動していくからである。さらに、最近のタイ経済の急速な発展による行政需要の拡大と多様化が、新たな地方自治機能の展開を要請するようになっている。

以上のような地方自治と国政の関係、そして急激な「地方」の変貌を念頭におきながら、タイの地方自治制度の歴史的背景および現状を整理・検討し、いくつかの問題点を指摘することによって、現在のタイにおける民主主義の実状を側面から明らかにしていくとともに、「形式的自治」から「実質的自治」への可能性を考察する。

### ベトナム南圻フロンティア社会と明命帝の地方改革

鳴尾 稔

1) 本報告の目的は以下の二点である。

- a. 19世紀初頭のベトナム南圻社会の基本性格（移動性、私的権力化）を明らかにする。
  - b. 1830年代の明命帝の南圻地方改革により集権的官僚制の制度的基盤が確立されたが、にもかかわらず、上の性格が存続したことを明らかにする。
- この二点の分析から、前植民地期ベトナム南圻社会において、人的資源の公的統制に対する私的従属関係が拮抗していたことを示したい。

2) 明命帝の地方改革以前の南圻社会の基本性格については、以下のことが言える。

移動性については、多岐に分かれる水道による交通の統制の困難、開墾後定着せず移動する傾向（焼畑の名残）、容易に生地を離れる傾向が史料的に確認される。この点は、公的統制を逃れる人的資源の量の大きさを示す。

私的権力は、一方で「遊民」・「無頼」と呼ばれるような非定着民と債務的な従属関係を結び、他方ではその労働力を利用した営利活動によって財力を確保することで形成された。これには、土地占有の自由を背景に土地集積した営利的地主（「彊豪」、「豪富」）と私兵を擁する地方官が挙げられる。私的権

力化の到達点が嘉定城總鎮黎文悅の対抗権力の形成であった。

3) この南圻の特異性に対して全国一律支配を企図する明命帝は、地方改革を行い、北圻と異なり、散村形態をとる南圻においても北圻同様に村落を単位として人と土地を統制し、また江船税例などで河川交通を統制した。しかし明命帝没後、クメール大反乱とタイ侵攻により社会は疲弊し阮朝の社会的動員力は低下し、南圻住民の移動性（徵兵忌避のため他郷へ移動）と私的権力化（「豪里」による土地占奪、富家による貧民への諸々の貸与、地方官による營利と私兵の維持）は持続した。

要するに、南圻社会と国家の関係は、主として人的資源の統制をめぐる公権力と私的権力のせめぎあいであった。

#### 銅鼓の分布からみた東南アジア初期国家群の成立基盤

今村啓爾

銅鼓は東南アジア考古学でもっとも注目される器物として、19世紀以来、数百の論文の主題にとりあげられてきたが、その研究熱は衰えることなく、この2、3年にも中国、ベトナム、インドネシアについて大きな資料集の出版が相次ぎ、その分布状態はますます明瞭になってきた。銅鼓の研究資料としての重要性に、それが東南アジア全体を一つの視点から見渡す手段を与えてくれること、東南アジア全体に考古学的年代を与えるための最良の資料であることがあげられる。

最古の銅鼓である先ヘーガーI式銅鼓は紀元前4世紀頃には雲南、ベトナム、タイに分布していた。続くヘーガーI式銅鼓は紀元前1世紀頃にはフィリピン、ボルネオ、セレベス、ビルマを除く全東南アジアに分布していた。その分布状態は我々にいろいろなことを考えさせるが、とくに興味をひくのがジャワを中心とするインドネシアにおける濃い分布とベトナム中・南部、カンボジアにおける稀薄な分布である。

当時の銅鼓がどのような機能をもっていたかについては、中国雲南省石寨山遺跡の貯貝器上の人形像などがよい手掛りとなる。農業の発展の中で階層化、部族の統合化が進みつつある社会において、農耕儀礼や王権を認める儀式に大きな

役割を果たしていたものとみとめられる。銅鼓の分布の濃い地域は、トンソン文化の基盤となったものと同種の農業が適合、発展した地域にほぼ相当するとみることができるのではないだろうか。一方、銅鼓分布の稀薄なベトナム中・南部からフィリピン、サラワク、マレー半島の一部にはサーフィン系の文化が分布したが、この文化のもつ海洋的な性格は顕著である。この地域における国家の成立には海上交易の支配の要求が刺激になったのではないだろうか。トンソン系文化とサーフィン系文化の関係は単純に地域差といえるようなものではない。むしろトンソン系文化が古く、サーフィン系文化がおくれるという認識が基本になろう。この2者の関係の解明は東南アジア考古学におけるもっとも大きな課題の一つであるが、その正当な解決法はそれぞれの文化の細分と対比を進めることにある。

#### 《共通論題「東南アジアにおける近代文学の成立をめぐって」研究発表・要旨》

##### タイ文学史の中での近代文学の性格 －主旨説明に代えて－

吉川利治

近代文学成立以前のタイ古典文学は『ラーマーヤナ』のタイ語訳『ラーマキエン』や宗教文学『ジャータカ』、あるいは『パンヤーサ・ジャータカ』をオリジナルとするインド系の説話か、タイの風土で生まれた『クンチャーン、クンペーン』や『プアラバイマニー』などの、多くは韻文で表現された作品を一般に指していた。また散文学として『三国志演義』タイ語版や王朝年代記から取材した『ラーチャーティラート』も古典文学として挙げられ、1930年代以降に登場する作家シープーラバーの小説、ドークマイソットの小説、コー・スラーンカナーの小説とは区別して考えられている。また『クンチャーン、クンペーン』、『プアラバイマニー』や『三国志演義』、『ラーチャーティラート』から近代小説が登場するまで約1世紀の期間に翻訳小説、翻案小説が登場している。従来のタイ文学史の通説に従いながら、タイ古典文学から近現代文学への流れを、作品のテー

マ、登場人物、世界観、表現形式、著者、読者などから、私は4つの時期に分けて簡略に整理してみた。

作品	『ラーマキエン』 『ジャータカ』等	『クンチャーン、クンペーン』『三国志演義』等	近代小説	現代小説
主題	恋愛、活劇、戦争 教訓	恋愛、闘争、運命	恋愛、人生 因習との葛藤	恋愛、政治や 社会との葛藤
世界観	神話的世界 近寄り難さ 賛美、崇拜、信仰	歴史的世界、運命感 人間臭さ 憧憬、親近感	人道主義 近代的自我 向上心	不条理、敗北 逃避、挫折感 不撓不屈
登場人物	定型化された神々 王侯貴族 人格化された動物	英雄豪傑、王侯貴族 下級役人 貿易商人	実業家 知識人	一般庶民 農民 労働者
表現形式	韻文、韻文散文混 淆体、奇想天外、 荒唐無稽 壁画・歌舞音曲を 表現手段、説教	韻文、散文 写実、華麗、勇壮 歌舞音曲を表現手段 語り物	散文 写実 書物	散文 写実 書物、映画 テレビ
著者と読者	国王や王をパトロンとする宮廷詩人たち、僧侶、 都市と地方都市の住民	国王や王をパトロンとする宮廷詩人たち 移住者、 バンコクを中心とする フロンティア都市住民	貴族出身者 新興階級の インテリ 都市住民	インテリ 地方出身者、 映画、テレビを通じて、広く見られる

上記のようにして眺めてみると、タイの近代文学は古典文学と呼ばれる作品からは、大きく隔たる性格があることがわかり、近代文学は現代文学へ連なることがわかる。ここで古典文学を二つに分類したのは18世紀末から19世紀初期に書かれた『ラーチャーティラート』、『三国志演義』は、ビルマから移住してきたモン人を祖先に持ち、華僑の大量移住の上に成立した現チャクリー王家の存在とかかわり、散文の世界を開いて、以降に時代劇という大衆小説の大きな流れを形成し今日に至るからである。また『クンチャーン、クンペーン』や『プアラバイマニー』は、従来の韻文形式で表現しながら、下級役人の恋愛や人生に関わるテーマを追及し、また対外貿易で広がる外部世界への関心を示す視点を持っていたのが、1930年代から始まる近代小説の精神にも生かされているのではないかと考えるからである。すなわちブルジョアが自分たちの世界を描いていたのが、ブルジョアの没落と庶民階級の勃興により、それぞれが相手の立場に关心を持ち、身辺を見回すようになって近代文学が登場したのではないか。政治的・社会的背景に階級社会の崩壊、移民の同化、近代教育の普及、新聞・雑誌の刊行、啓蒙主義・民主主義思想の紹介等々が近代文学成立に貢献したことはいうまでもない。逆に、20世紀初頭に登場したイギリスの翻訳小説や翻案小説の内容が近代小説にどれほど影響を与えたか、という疑問につながる。確かに現代文による小説という形式はこれらの影響であるのは理解できるが、内容として全て通俗小説、大衆小説の類であったのは、別にながれとして今日の通俗小説、大衆小説に連なるものであり、今もなお、翻訳も続けられているからである。

ベトナム

加藤 栄

ハノイの文学史記述によれば、フランス植民地期の合法文壇におけるベトナム文学（近代文学）は、グエン朝期までの文学とは一線を画すものとされながら、一般にいわれる「近代文学の成立」という問題の立て方はされてこなかった。その理由として次のことがあげられる。

まず第一に、近代文学成立の要件と考えられるブルジョアジーの成長が、ベト

ナムではきわめて弱体であったこと。第二に1930年にインドシナ共産党が創設され、ホーチミンの初期作品に代表される「革命文学」が、近代文学と時期を同じくして登場する。「革命文学」は社会主義リアリズム文学の先駆をなすものであり、「現代文学」へ脈々と連なる、それ独自の流れを形成するものとされる。したがって「革命文学」が本流とすれば、「近代文学」はその傍流としての位置づけしか与えられてこなかった。第三に、1930年代から45年の八月革命までの時期は、ベトナム文学史上「もっとも複雑な発展」をとげた時期とされ、長期にわたる戦争などの事情で、その分析が必ずしも十分にはなされてこなかったことである。また近代文学批評の際の評価の力点も、各時期の政治情況の変化によって微妙に変転してきた。

近年、政治と文芸との微妙な関係などをめぐり、熱い議論が闘わされる中で、近代文学に属する作家たちの作品も再評価の俎上に乗せられるようになった。またこれまでもっぱら批判の対象であった作品が、ハノイで再発行されるようになってきている。

本報告では、ハノイにおける文学史記述の問題点を明らかにした後、近代文学の成立を担った「新学」知識人に焦点を当て、フランス植民地体制の確立によって生じたベトナム社会構造上の変化の問題をからめながら、「近代文学の成立」を論じたい。

ビルマ

堀田桂子

ビルマ文学史においては、1904年以降に出てきた作品群を「近代小説（kala-paw）vatthu」と呼ぶ点でほぼ一致をみている。しかし、「近代小説」として言及される作品が何らかの基準によって選別されているにも関わらず、その基準なり「近代小説」的要素なりの分析は、さほどなされてこなかった。そこでまず個々の評論、研究において「近代小説」のメルクマールと考えられるものを抽出すると、以下のように分類できる。

(a) テクスト自体に起因する新しさ

内容〔ガルーダやナックなどの登場しない「現実」を扱うもの、社会批判精神〕

形式（手法・文体）〔韻文からの脱却、リアリズムの確立〕

(b) テクスト外の要因から把握できる新しさ

作家〔教育基盤（英語における novel を知った人間）〕、読者の確立〔教育制度の発達、植民地政府官僚の登場〕、社会的要因〔出版の商業的基盤の確立〕などである。

さらに新たに指摘したい点としては、(a) の内容において、恋愛における 1 対 1 の関係が確立していく過程。手法や文体のレベルでは、出来事を語る「語り手」による叙述が、次第に登場人物の視点に入り込んでそこから眺める「映し手」的叙述となる変化、人物を描く際に映画的手法ともいえるような鳥瞰的視点が用いられるようになる過程、初期の小説に必ず付けられた功利主義・教条主義的ともいえる「序文 nidan」の変化、などである。特に従来古さを残すと見なされてきた初期の小説（1900—20 年発行）をこれらの視点から眺め直すことで、初期の文学における近代化が包括していた様々な方向性が明らかにできるはずである。

(b) のテクスト外の要因のなかでは、従来それぞれの要素が羅列的に提示されるに留まつたが、商業出版の拡大という背景をふまえ、出版全体に占める小説の書籍点数といった数量的把握や、初版の出版部数や価格といった物理的「書物」としての側面を理解することで、近代小説をマス・メディアの 1 ジャンルとして捉える必要もある。さらにここで追ってきた「新しさ」がビルマ社会におけるどのレベルのものだったかを探るために、近代小説の読者を比定していく必要もある。今後の課題となるが、ビルマという個別の問題に立ち戻った場合、同時代の人気ジャンルでありながら近代小説とはある意味で対極にある「劇文学」を追うことで、逆に「近代小説」ひいては文学の「近代化」の客観的意義が歴史的に把握できるとおもわれる。

### インドネシア

### バタビアにおける近代文学の誕生

松尾 大

正当な文学史はナショナリズムの発生とそれに伴う国語運動をメルクマールとして近代文学をとらえ、その発生時期を1920年としている。しかし近年にいたって、19世紀後半以降の商業出版による大衆文学を近代文学としてとらえる見方が出はじめている。正当な文学におけるような高尚なテーマ性ではなく口語を母体とする卑俗な“低級マレイ語”で書かれているように見えるこの大衆文芸の中に、まぎれもなくリアリズム、人間の存在と社会に対する新しい知覚、観念が認められるからである。

ここでは大衆文芸の主たる生産地、消費地であった20世紀初頭のバタビア社会の文芸に注目したい。進歩の時代という合言葉が流布した当時のバタビア社会の文学的土壤を見る時、植民地的秩序の定着と教育、雇用機会の拡大による公衆の生成が重要であろう。西歐的諸様式の提示者とその受容者との広範囲にわたる交渉関係の成立である。ジャーナリズムはこの公衆の生成過程に大きな貢献をなしたが、その中で育まれたバタビア文芸は、翻訳物においては西洋を、創作物においては蘭印社会を照らし出す探照灯であった。

ここで取り上げた4編の作品の内2編はこの時期に特徴的な、実話を素材としたおどろおどろしい悪漢物である。共通するライト・モチーフは内と外、光と闇に切り分けられた二つの世界、進歩の光に輝く都市と不気味な闇につつまれた土着社会とが、そのあわいに住む人々を介して織りなす交渉の様である。西歐文化に自己同定する作者たちが土着の民を見る眼は、闇の中からちん入の隙を窺がう異邦人である。残る2編は純愛物である。真実の愛の意味を得た男と健気に真実の愛を求める女とのからみ合いは、伝統社会における結婚・妾制度が打算や強制にもとづいているという作者の観念との対比で読まれるべきものであろうが、ここにも“光と闇”的構図が浮かび上がってくる。

## 研究・資料短報

### I 幻のガルー王国 富尾武弘

先に「古代ジャワとスマトラ」（摂南学術B. No. 7）を発表し、ジャワとスマトラ交渉史の中で、訶陵国及びスリウイジャヤ国史の解明を試みた。そこにおいては、次の大きな課題はジャワの訶陵国のインドネシア音の解明であるとした（注42）。

そこで、この国のインドネシア音の解明とそれに伴う、インドネシア古代史の新しい展望を主題とした研究を進めてきた。結論からいえば、訶陵のインドネシア名はガルーである。ジャワ人は発音に際して無声音化することが多いので「ガルー」となる。まさに元史爪哇伝（卷 210）その他、に可見する「葛郎」に相当するものである。

ガルー王国といえば、現在では「バラヒヤンガン物語」にのみ伝えられている幻の王国であった。しかし、ガルー王国がマジャパヒト成立以前にまで、存続をつづけていたことが確認され、この「バラヒヤンガン物語」にその伝説が残った経緯もあきらかにし得るようになってきた。

ジャワの人々の脳裏からは、マジャパヒト期と、それに続くイスラム化の時代の中で、「ガルー王国」の名すら消えてしまったが、マジャパヒトの勢力に追われた旧勢力の残存したものが、西部ジャワに伝えたものであったろう。

先の「古代ジャワとスマトラ」では、訶陵の中国遣使年代から「前期訶陵」と「後期訶陵」に分けたが、研究が進むにつれ、中国史料に残る訶陵からの遣使記録というものは、インドネシアにおける政治状況を如実に反映しているものであることが判明する。

732 年の中北部ジャワのチャンガル碑文と、760 年の東部ジャワのディナヤ碑文との相関関係。ディエン遺跡とウンガラン山のグドン・ソンゴ寺院群。さらには、有名な907 年バリトゥン王のマンティヤーシー I 碑文等々。

これらすべての史料は、訶陵中国遣使年代と相補い合って、中部ジャワ古代史の解明に重要な鍵となるものばかりであることが明瞭となってきた。

今後、さらに研究の進展が求められる分野は、ジャワ王国の構造と、ジャワ王

朝とマラッカ海峡の関係解明であることが痛感させられているところである。

## II マレーシア研究会（在クアラルンプール）の活動報告（1988年 7月現在）

中澤政樹

[ \* 以下、前回紙面の都合により割愛した部分を載録させていただきます。 ]

### [ 3 ] 発表／活動内容（発表内容は各発表者のレジュメに従う）

- No.1 1987. 8. 20 杉本 均 教育の機会均等と民族問題  
2 8. 27 佐藤宏文 マレー語研究の歴史  
3 9. 3 中澤政樹 イスラム原理主義運動 (dakwah) について Part I  
4 9. 11 水島 司 Cameron Highlandのティ・エステート見学  
5 9. 17 水島 司 華人（潮州系）道教寺院中元祭見学  
（Old Town. P. J.）  
6 9. 24 杉本 均 マレーシアの教育制度概論  
7 10. 1 杉本 均 マレーシアの教育事情  
8 10. 8 金子芳樹 マレーシアにおける憲法論争  
9 10. 15 中澤政樹 東南アジアの宗教：マレーシア・タイ比較  
10 10. 22 佐藤宏文 マレー語音韻論 その1  
11 10. 29 水島 司 多人種社会における集団形成の比較研究  
12 11. 5 杉本 均 謎の研究発表－中国語小学校長問題？  
13 11. 12 中澤政樹 調査報告 Part I：  
ケダー州ラナイ村概観とその問題  
14 11. 19 金子芳樹 中国語小学校長問題  
11. 26 （お休み：エイサー発表会；Asrama Zaba, U.M. を控えて）  
15 12. 3 金子芳樹 I S A発動をめぐって  
16 12. 10 塩出浩和 ARE問題について  
17 12. 17 黒田景子 ケダー戦争をめぐって  
12. 24 （クリスマス・パーティ；K.L. 竹葉亭にて）  
18 12. 31 佐藤宏文 私のマレー語学習から得るもの  
19 1988. 1. 7 水島 司 マレイシアにおける秘密結社の研究史

1. 14 (お休み)
- 20 1. 21 杉本 均 新初等教育カリキュラム (KBSR)
1. 28 (Frasar's Hill にて吹き矢大会)
- 21 2. 4 水島 司 前回の続き及び二次集団への人種別加入動向研究
- 22 2. 11 新名隆子 私のマレーシア留学
- 23 2. 18 中澤政樹 マレー村落調査モノグラフ解題 Part I
- 24 2. 25 中澤政樹 マレー村落調査モノグラフ解題 Part II
- 25 3. 3 金子芳樹 U M N O 非合法判決とその後の動向
- 26 3. 10 @山本信人君 (慶應大学政治学研究科修士課程)との座談会
- 27 3. 18 @池端雪浦助教授 (東京外国语大学, A. A. 研)との座談会
3. 24 (お休み:個人研究活動 - 2名タイ、1名ジョホールへ)
- 28 3. 31 前週の活動に関する報告会 (主に南タイ訪問について; 黒田)
- 29 4. 7 @根津 敦 サバ州政治史 (国際大学修士課程)
- 30 4. 14 中澤政樹 イスラム原理主義運動について Part II:  
堀井論文批評
- 31 4. 21 佐藤宏文 マレー語音韻論 その2
- 32 4. 28 黒田景子 「東南アジア」に関する漢文史料
- 33 5. 5 佐藤宏文 Hikayat Hang Tuah の背景説明
- 34 5. 12 上杉富之 今後の調査・研究計画について
- 35 5. 19 金子芳樹 南北ハイウェー問題:  
公共事業民営化をめぐる汚職訴訟
- (~ 6. 30 休止: 充電期間 - 各人個人研究に専念)
- 36 6. 30 出席者の研究等近況報告及び今後の会運営について
- 37 7. 7 黒田景子 南部タイ・ムスリム問題
- 38 7. 13 中澤政樹 調査報告 Part I: 村落開発に伴う農村社会の変容
- 39 7. 21 中澤政樹 調査報告 Part II: 村落開発に伴う農村社会の変容
- 40 7. 28 金子芳樹 司法府とマハティール政権:  
最高裁判事サスペンド問題
- 41 8. 4 佐藤宏文 マレーとブミプトラの概念をめぐる資料  
@宮本 勝助教授 (国立民族学博物館)との座談会

- 42 8. 11@関本照夫助教授（東京大学、東文研）  
ジャワ系移民社会（Sabak Bernam）調査報告
8. 17 中澤政樹 アルカム教育センターとチニ湖（パハン州）見学
- 43 8. 25（中原道子先生との座談会を予定）
- 44 9. 1 上杉富之 サバ州ムルット族調査事前報告  
[ @は外部招待発表者 ]

\* 原稿募集：

幅広く会員相互の研究や資料に関する情報の探索・提供の場にしたいと思います。研究資料や活動についての会員各位からの多数の情報提供を、また、もしお探しの資料や情報がございましたら、ご投稿を本欄宛てにお願いいたします。

### 新入会員

### 住所変更など

\* 省略させていただきます。詳細は新しい会員名簿をご覧ください。

住所・所属の変更がありましたら、すみやかに事務局までご連絡ください。従来より、ご連絡いただけなかったために、学会からの通信や学会誌をお届けできなかつたことが多々ありました。よろしくご協力をお願いいたします。

## お願い

### 『東南アジア史学会会員著作論文目録 補遺』ご購入のお願い

『東南アジア史学会会員著作論文目録 補遺』を、定価1000円、会員価格800円にて販売しております。また、1979年度版の残部も多数ございますので、併せてご購入ください。なお、図書館等による公費購入の際には、穂高書店を通して、定価にてご購入くださいますようお願いいたします。

### 『東南アジア－歴史と文化－』ご購入のお願い

学会誌『東南アジア－歴史と文化－』の販売促進を図りたいと思いますので、会員方の所属の大学及び研究機関でぜひご購入方をお願いいたします。

---

1989月11月発行

発行者 東南アジア史学会（会長 生田 滋）

住 所 〒102 東京都千代田区紀尾井町7-1  
上智大学アジア文化研究所

電 話 03-238-3696, 3697

郵便振替 東京 4-357500 東南アジア史学会

---